

ボランティア通信



オンラインコミュニケーション研修（9月24日開催）

9月24日、「オンラインコミュニケーション研修」（ボランティア・ビューロー主催、株式会社インソース実施）を開催しました。

夏期休暇前に実施したボランティア系課外活動団体のリーダーによる情報交換会では、コロナ禍で例年通りのボランティア活動ができない中、オンラインでのメンバー間のコミュニケーションを円滑に進めることの難しさが課題として挙げられていました。

ボランティア・ビューローでは、コロナ禍で学生間の何気ないコミュニケーションの機会が減少傾向にある中、学生の皆さんがミーティングをリモートで行う際にどのようなスキルが必要か、検討しました。

そして、研修の内容を策定するにあたり、以下のゴールを見据えました。

- ・話し手、聞き手、中立役を実際に経験し、各役割に対する視点を持つ。
- ・リーダーシップ、合意形成に必要な「調和力」を身につける。
- ・今後経験する、就職活動や卒業後を見据えて、日常生活での実用化を目指す。

今回の研修では、前半に「チームマネジメント」、「コミュニケーションにおける心構え」、「アサーティブな思考とは」など、基本事項の理解を学びました。

後半は、実践編としてファシリテーションの基本について説明を受けた後、グループワークで実際にファシリテーターの役割を経験し、メンバーや講師からフィードバックを得ることでオンライン討議を成功に導くためのスキルを学びました。

今回はボランティア活動をしている個人や団体のメンバーを中心に、26名の学生が終日にわたるオンラインでの講習に意欲的に参加しました。研修後に実施したアンケートでは、「今後の学生生活にどのように活かしていきたいか？」という質問に対して、

- ・相手への伝え方や人間関係に活かしていきたい。
- ・リーダーシップという名目であったが、相手が誰でも通じるコミュニケーション戦略を知る事ができた。
- ・ファシリテーターに初めて挑戦して、話題がそれないようにコントロールする事の難しさを実感した。今後は、話題がそれたら軌道修正するような練習がしたい。
- ・リーダーシップを発揮する以外の場面でも、友人関係や授業でコミュニケーションの難しさを感じていたが、それらにも対応できるスキルを身に付けることができた。人と話す事を億劫に感じていたが、これからは楽しみになった。



等の感想が寄せられました。

団体におけるメンバー間のコミュニケーションや、ボランティア受入れ先とのやり取りのみならず、今後の学生生活の様々な場面で、今回の研修の成果を活かして欲しいと思います。



上智大学ボランティア・ビューロー（2号館 1F 学生センター⑧窓口）

Tel : 03-3238-3525 Mail : volunteer-co@sophia.ac.jp

Twitter : @SophiaVolante

LINE@ : (登録時に希望する配信内容「ボランティアについて」のチェックを入れてください)

※「ボランティア」とはポルトガル語の舵取りという言葉から、学生の皆さんのボランティア活動と社会を繋ぐ役を果たしたいという意味が込められています。

「過疎地での暮らしを通じて、復興と日本の未来を思い描く」 リモート企画プロジェクトチーム結成

2017年度から宮城県南三陸町にて1泊2日で行っていたツアー企画ですが、2020年度はリモート形式で実施する事を検討しています。

震災からの復興と過疎化により発生する問題を日本が将来抱える問題と捉え、解決の方策を考える企画です。8～9月にかけて、ボランティア・ビューローと共に、オンライン等で実施する企画・運営に参加してくれる学生を募集し、学部・学年も様々な7名の学生がプロジェクトチームのメンバーに決定しました。

メンバーは、「震災からの復興・過疎化による問題の解決」や「南三陸の魅力」についての学びが得られるプログラムを作成→上智生の参加者を募集→プログラム実行、までを担います。

ご協力いただく南三陸観光協会の皆様から現地のニーズを教えて頂き、取り入れながら、上智大生にとって、実りあるプログラムが提供することができるよう、限られた期間内で、リモートで話し合い、作り上げていきます。

第1回Mtgでは、自己紹介、運営の担当決め、参加申し込み時に提出した企画発表、どんなチームにしたいか？などを話し合い、お互いを知る機会としました。

チームの目標は「上下関係の無い、自然体でいられるチーム、敬語は使う必要なし」に決まりました。

そして4回目のMtgで、「①防災 ②産業 ③働き方と暮らしの3つの視点から地域づくりについて考える」という企画の大枠が提案されました。

「南三陸からの学びを身近な地域に当てはめ、自分事として考える」ことは、受講者がそれぞれの地元からオンラインで参加する良さを生かせるのではないかと、効果も見込まれます。

今後、検討を重ねて企画を固めていくこととなりますが、「学生が作る学生のためのプログラム」がどのような形に作り上げられていくのか、とても楽しみです。



参加者募集の際はLoyola等でご案内いたします。

復興庁主催 復興・創生インターン2020年度夏報告

今回は主にオンラインで実施された「復興・創生インターン」に本学から12名もの学生が採用されました。このインターンシップは、岩手県、宮城県、福島県の被災地域で、経営者の右腕となり、企業の課題解決に挑戦する実践型プログラムです。

6月に上智大生対象のZoom参加者募集説明会を2回開催し、エントリー、選考面談、採用、事前研修、契約締結オリエンテーションを経て、実習が開始されました。



実習は、全国の大学生とともに、被災地企業と課題調査から開始します。本学から参加した12名の学生は11の企業に分かれて、受け入れ地域で活躍する地域コーディネイト機関のサポート体制のもと、他大学の学生とともに、チームを組んで活動しました。

次ページにて、2名の参加者の報告をご紹介します。課題解決に向けて、初めてオンラインでお会いする被災地域の企業の方や、他大学の学生さんと、どのように協力して成果を生み出したのでしょうか？



ボランティア通信



上智大学ボランティア・ビューロー (2号館 1F 学生センター⑧窓口)

Tel : 03-3238-3525 Mail : volunteer-co@sophia.ac.jp

Twitter : @SophiaVolante

LINE@ : (登録時に希望する配信内容「ボランティアについて」のチェックを入れてください)

※「ボランティア」とはポルトガル語の舵取りという言葉から、学生の皆さんのボランティア活動と社会を繋ぐ役を果たしたいという意味が込められています。



上智大学ボランティア・ビューロー (ボランティア)

SOPHIA VOLUNTEER BUREAU

復興・創生インターン2020年度夏報告① 石巻ブロックより

文学部 フランス文学科4年 清水美里さん
インターンシップ受入企業 木の屋石巻水産 <https://www.kinoya.co.jp/>

私は7月末から9月の二ヶ月間、復興創生インターンの石巻ブロック2、木の屋石巻水産でインターンをしました。祖母が南相馬に住んでいますが、私は復興の力になれていないと感じていたため、在学中に東北地方ともしっかり関わりたいという希望がありました。

また、「地方創生と国際協力を関連付ける」ということが言われている中で、国際協力に興味があり、東京育ちの私は、地方のことをより理解する必要があると考えたため、今回参加することにしました。

私たちのチームはマーケティングを活用し、「木の屋の缶詰」ブランドを若年層向けに認知向上をすることが目的でした。特別に広告代理店でマーケティングのプロとしてキャリアを積まれている方が関わって下さいました。学生は2年生2人、4年生2人の4人チームで、上下関係を作らず「木の屋インターン生チーム」として協力し活動を行いました。

得た学び

マーケティングの概要や用語は、大学の授業でも学べるかもしれませんが、実践する機会をこのインターンで持てたことは貴重な経験でした。具体的には、リサーチとしてアンケートを作成、実施し、519サンプルを集め、分析すること、3C分析、STP分析、ペルソナ策定、共感マップの作成、プロモーション戦略の立案と、一通りのマーケティングを主体的に実践しました。

リモートでの活動

期間中、毎朝8時から一時間「朝活ミーティング」を続け、その日にそれぞれが取り組むタスクの確認と、タスクの進捗共有をしていました。午後も毎日三時間ほど活動していました。ミーティングや、zoomをつながりながらリモートで書類の共同編集などをしていました。

リモートの工夫

大学も出身も学年も異なる四人がリモートで信頼関係を構築できた秘訣は、以下の通りです。
毎朝「朝活」で顔をあわせることで結束力を強めたり、インターンの合間に、木の屋の商品の「缶詰」を食べながらリモートランチ会を開催し親睦を深めたりしました。また、リモートでは感情が伝わりにくいため、発言するときに普段より明るい雰囲気でも話すことも意識していました。

効率よく作業を行うための工夫

- リモート会議はタラタラしがちであるため、以下のような点で工夫しました。
- 議論の時間を区切り、議論が行き詰まったらペンディングにすること。
- 口だけではお互いの意見を共有しきれないので、画面共有をすることで、みんなで同じものを視覚的に見られるようにすること。
- グーグルドライブで資料を共同編集することで、みんなが何をしているのか、理解の足並みを揃えること。



参加して良かったこと

Slack、Zoomなどオンラインのコミュニケーションツールに慣れることができました。対面ではない分、伝えることが難しいため、いかに相手にわかりやすく伝えられるかを考えて行動するようになりました。

東北地方(石巻)と関わってみて

石巻には魅力的な水産業がある一方で、国内の水産加工品や魚食文化への関心は薄れてきているという現状があることに気づきました。そこで、若者が率先してそれらの製品を食べ、デジタルのツールで感想を発信していくことが、石巻の成長に繋がると実感しました。オンラインでのインターンだからこそ、木の屋石巻水産、コーディネーターのフィッシャーマンジャパン、そしてマーケティングのプロの方と毎日お話をさせていただくことが叶い、目の前の課題を「自分ごと」として捉えることができた二ヶ月間でした。まだ、石巻には行ったことがありませんが、この街と深く関わってみて、石巻に関するニュースがあると思わず反応してしまう毎日です。行けるようになったら是非足を運びたいと思います。

復興・創生インターン2020年度夏報告② 葛尾ブロックより

外国語学部ドイツ語学科2年 山崎彩音さん
インターンシップ受入企業 葛尾創生電力株式会社 <http://www.katsuden.co.jp/>

私は今年の夏に、福島県で再生可能エネルギーの普及を推進する「葛尾創生電力株式会社」のインターンシップに参加した。

私が復興創生インターンに参加した理由は大きく二つある。

一つ目は震災の記憶を風化させたくないという気持ちだ。私は福島県で生まれ育ち、小学生の時に震災を経験した。内陸に住んでいたため津波の被害はなく、幸いにも地震の被害も比較的小さかったが、震災発生時に学校で体験した揺れ、その後の余震の恐怖や、放射能に対する漠然とした不安、福島県民であるということから受ける風評被害など、数えきれないほどの経験をした。大学生になり自然と震災について考える機会が減る中で、福島県の他の場所で震災を経験した人たちの話を聞いてみたいと思った。彼らに経験や現状を共有してもらおうことで、震災の記憶にもう一度向き合いたかったのだ。

そして二つ目の理由として私自身の環境問題、とりわけエネルギー問題に対する当事者意識が挙げられる。

私は原発事故を経験した後から、再生可能エネルギーをはじめとした環境問題に興味を持った。そして脱原発を掲げ、世界的な環境先進国として注目を浴びているドイツに留学し、現地の環境に対する取り組みを見たり、福島の事故やその後の現状を伝えたり、エネルギーに対する意見交換を行ったりした。帰国後は現在在学している上智大学のドイツ語学科に進み、ドイツやヨーロッパ圏における環境政策について学んできた。しかしふと日本とドイツの事例を比較したいと思った際に、自分が日本の環境政策をあまり知らないことに気が付いた。そこで、日本のエネルギー政策、とりわけ自分の故郷である福島県の事例を学びたいと考え、ゼロカーボンビレッジを掲げる、葛尾創生電力でのインターンシップに参加した。

オンラインでの活動に不安はあったものの、同じ企業でインターンをした3名の大学生メンバーとしっかりと連絡を取り合い、話し合いをしたことで安心して活動に取り組むことが出来た。最終的には、葛尾創生電力の営業に使われる広報用パンフレットと、葛尾村の地域振興事業イベント企画案を提出した。環境問題・エネルギー・まちづくりなど、メンバーの興味は多岐にわたっており、それぞれの大学での専攻分野も全く違ったため、一つの問題に対しても多方向から議論し、より良い結果を導き出すことができた。

またオンラインでのやり取りは、オフラインよりも話し合いの雰囲気がかみにくかったため、場にいるみんなが話しやすい環境づくりを意識する中で、オンラインのコミュニケーションスキルを身に付けることが出来た。それに加えて、企業さんやコーディネーターさんとのオンライン上のやり取りから、社会人の基本である敬語の使い方や、連絡の取り方を自然と身に付けることが出来たように思う。

今まで私は、常に自分を軸にして考え、行動してきた。どんなスキルを身に付けられるのか、誰と繋がることが出来るのかなど、何をしたら自分のためになるかばかりを考えて、優先していたように思う。しかしインターンの軸となるのは、企業さんである。そのためステークホルダーを意識しながら、誰のために何をどのように行うのか、そのアクションをするとターゲットにどんなメリットがあるのかなどを考えることは、私にとって新鮮でとても難しかった。しかし、この経験は次回の何かの機会に必ず役に立つと考える。このインターンシップをゴールとせず、今後もたくさんのチャレンジをして、新しいことを吸収し続けていきたい。



← 葛尾創生電力株式会社
社が使用している蓄電池
(太陽光発電の電気を貯めて、72時間電力供給を行う事ができ、防災力の強化に役立っている)